

世界文化遺産登録

国立西洋美術館 と 芦屋市民センター ルナ・ホール

先月、日本で唯一のル・コルビュジエ作品「国立西洋美術館」が、世界文化遺産に登録されました。
国立西洋美術館の監理を行った坂倉準三氏は、芦屋市民センター、ルナ・ホールの設計を手掛けました。
今回は、株式会社坂倉建築研究所大阪事務所長・宍道弘志氏からお話を伺い、そのルナ・ホールの魅力に迫ります。



落成時のルナ・ホール
1970(昭和45)年

■ル・コルビュジエと坂倉準三

国立西洋美術館が建設される際、設計者ル・コルビュジエが描いた図面を基に工事のための図面をまとめ、現場をサポートしたのは、3人の日本の建築家でした。彼らはパリのル・コルビュジエのアトリエと一緒に仕事をした経験を持つ弟子たちで、その1人が坂倉準三でした。その坂倉が設計したのが、芦屋市民センターとルナ・ホールです。



写真は、国立西洋美術館の設計準備のため1955年(昭和30年)に来日したル・コルビュジエ(右)と坂倉準三(左)を撮影したものです。

■坂倉準三が作り上げたルナ・ホールの魅力

ルナ・ホールは当時、芦屋市民会館の第3期工事として建設され、先行する第1・2期の集会施設(市民センター本館)が開放的な空間であるの対比的に、劇場空間であるルナ・ホールはコンクリートで包まれた内包的な空間として構想されました。

劇場空間へのアプローチとなるホワイエは、余計な色や形が入り込まないよう、床・壁と一体となった椅子と全てが黒のみの内装、その中に一本だけ具体芸術の創設者・吉原治良氏の白線(この線は円を表現したものと聞いております)が入るといふ、非日常性を意識した空間になっています。劇場内部も黒で統一され、舞台は演劇などの多様な演出に合わせて形態を変えられるよう計画されています。

坂倉は建築の設計において、それが建つ場所の特性や使われ方を重視し、その結果として多様なデザインの建築を産み出しました。その根底にあるのは、師ル・コルビュジエから受け継いだ「人間の幸福のための建築創造」という思想です。その言葉を目指し、スタッフと一緒にルナ・ホールを作り上げてきました。坂倉は口癖のように、「(人間の歴史というリレー競技の一走者として)次の走者に間違いなくバトンを渡すべく一生懸命走らなければならない。」と語っていました。坂倉没後は事務所スタッフがその思いを受け継ぎ、芦屋市民センター、ルナ・ホールも皆さんから愛され、世代を超えて大切に使い続けられています。

